



# 瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部  
東京都世田谷区瀬田 4-16-1

ミサの時間：月曜日-土曜日 6:20am (「朝の祈り」に続いて)  
日曜日 7:00am、8:30am、9:30am



## 谷津神父さまの思い出

主任司祭 小西 広志 神父

十一月二十六日の夜中、わたしたちの兄弟、ベネディクト谷津良勝神父さまが帰天されました。少し思い出を分かちあってみます。

わたしが司祭に叙階して二年目に田園調布の修道院に派遣された時、院長と主任司祭をしていたのが谷津神父さまでした。その頃、生意気だったわたしは、この神父さまのアドバイスを理解できませんでした。しかし、司祭としての月日を重ねるうちに神父さまの言葉の重さを感じるようになりました。

谷津神父さまは教誨師を長年していました。教誨師は拘留所や刑務所を訪問して、そこにいる人々を励まし、力づけ、導く仕事をします。特に谷津神父さまの教誨は評判がよかったです。そして、時々、朝早くに迎えの車がやって来て出かけて行きました。そんな日は死刑囚の刑の執行があるのです。

死刑制度に反対するフランシスコ会の兄弟たちもいましたので、刑の執行に立ち会うのは死刑制度を容認していることだと谷津神父さまは批判されることもしばしばありました。

ある日、一緒に食事をしていて、こんなことを語られました。「死刑制度が正しいか、どうかはわからない。しかし、刑を執行されて亡くなっていく未決囚もかわいそうだと思うし、それ以上にかわいそうで気の毒なのは、刑を執行する刑務官たちだ。自分は彼らのためにも祈っている」。死刑囚の刑が執行された後、それに関わった刑務官たちのために講話をするのだそうです。

この話を聞いてわたしは、最初はピンと来ませんでした。しかし、今になって考えると、そんな心と身体が押しつぶされそうな刑務官たちに励ましの言葉をかけるのは、並大抵のことではないなと思います。もし、わたしだったら…、と考え込んでしまいます。

また、谷津神父さんは「喜び」を大切にしました。その「喜び」は大騒ぎするようなものではなく、心の深いところから湧き上がってくる喜びです。「あの若い人は喜びがないからだめだ」と、よく、若い神学生たちを批評していました。これもわたしにとっては理解を越えていたように思います。しかし、「喜びがない」と評価された若い兄弟たちは、召命が続かずフランシスコ会を去っていきました。

今、改めて思い返すと、わたしたち聖フランシスコの兄弟たちの心の深いところにあるのは「喜び」です。それは自己実現の喜びではなく、剥ぎ取られ、馬鹿にされても、それでもなお喜んで生きていけるという「完全な喜び」です。事実、アシジの聖人はそんな「完全な喜び」を追い求めたのです。

谷津神父さんは最期まで現役でした。ある総合病院のチャプレンとして働いていました。その働きは「喜び」そのものだったそうです。新生児を祝福するとき、若いカップルを祝福するとき、神父さんの笑顔に人々は魅せられていきました。時には重い病床にある患者さんを祝福するときにも、その笑顔で人々を励まし、力を与えました。

「お前には喜びがない」と天国から谷津神父さんに怒られそうな、そんな気持ちにさせられます。

谷津神父さんもわたしと一緒に痛風もちでした。生まれて初めて痛風の発作に苦しんだとき、わたしはあまりの痛さに、悲鳴をあげていました。そんなわたしの姿を見ながら、「うるさい。痛いぐらいなんだ。その痛みをイエスさまにおささげしろ」と谷津神父さんは叱ってくれました。なんと非人道的な、やさしさのかけらもない院長だと、わたしは思ったものです。

しかし、この夏、何度も神父さんを連れて病院に通うようになって、改めて気がついたのは、谷津神父さんは「痛い」とはけっして言いませんでした。恐らく、身体の痛みや苦しみはあったと思います。しかし、決して人には言いませんでした。まさに「イエスさまにおささげ」していたのでしょうか。

看取りの段階に入っても、一度も谷津神父さんは「痛い」と訴えませんでした。じっと堪えながら、祈りの中で旅立っていられました。

刑務官たちのように人知れず苦しむに人に共感し、「完全な喜び」を求め、それを人々に笑顔で伝え、そして、痛みと苦しみをイエスさまにおささげして生きた、信仰の先輩に心から感謝します。

主よ、どうかこの兄弟に永遠の安息をお与えください。